Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-25

「ーまだまだ謎だらけー ここまでわかった富松城」展を見学して（時評・書評・展示評）

山崎，裕太

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,14:186-191

(Issue Date)
2022-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100481748

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481748

KOBE UNIVERSITY

Current Topics & Reviews

時評・書評・展示評

「―まだまだ謎だらけ―　ここまでわかった富松城」展を見学して

山崎　裕太

はじめに

本稿は尼崎市立歴史博物館第五回企画展「―まだまだ謎だらけ―　ここまでわかった富松城」の展示評である。本企画展は同館三階企画展示室にて令和四年四月二十三日から六月十九日の間に開催された。富松城は尼崎市富松町に存在した中世城館であり、現在でも土塁と堀の一部が残存している。本企画展はこれまでの調査・研究により明らかになってきた富松城の姿を紹介するものである。

また、隣の展示学習室にて「地域の宝・富松城跡―保存活用の軌跡」が同時開催された。この展示と合わせて本企画展は成り立っているものと評者は見学して判断したので、本稿では「地域の宝・富松城跡」展にも若干の言及をすることとしたい。以下では、まず展示の概要を紹介し、その次に評者の抱いた感想等を述べていきたい。なお、以下で展示資料について言及する際、出典等は特に注記しないこととする。本企画展の出品目録を適宜ご参照願いたい。

第５回企画展
「―まだまだ謎だらけ―　ここまでわかった富松城」
会期　2022年4月23日（土）～6月19日（日）
会場　尼崎市立歴史博物館

同時開催「地域の宝・富松城跡―保存活用の軌跡」
会期　2022年4月23日（土）～9月4日（日）
会場　尼崎市立歴史博物館

一　展示の概要

本企画展は二部構成となっている。第Ⅰ章が「文献資料から分かる富松城」、第Ⅱ章が「発掘調査から分かる富松城」である。展示室は一部屋で、その壁面に沿って四周に展示資

料が配置される。以下、順に述べていこう。

第Ⅰ章では章名のごとく、文献資料を中心に富松城の来歴や具体像を紹介している。まず富松城の初見史料である長享二年（一四八八）の「鳴尾田地年貢算用状」から始まる。続いて『応仁後記』や『続応仁後記』、三好氏禁制などが展示され、戦国期前半の細川・三好氏の戦乱のなかで富松城が機能したことが紹介される。史料の他に、壁面に展示パネルが設けられ、各勢力の動向がわかりやすくまとめられている。また、地図により富松城をめぐる動乱が具体的にどのように推移したのか示されており、見学者が理解するための工夫がなされていた。

本章では文献資料からわかる富松城を紹介するわけだが、富松城は『細川両家記』の天文十九年（一五五〇）の記事以後、史料に登場しなくなる。しかし、それで展示が終わってしまうのではない。第Ⅱ章で紹介される発掘調査の結果から天正年間（一五七三～九二）に織田信長方の勢力により富松城が再利用されていた可能性に言及し『信長公記』を展示する。それだけでなく、江戸時代の水論絵図を提示し、そこに描かれる富松城跡を紹介する。色彩豊かな絵図史料であること、そして絵図の大きさゆえに、展示のなかでも一際目を引くものであった。本企画展の冊子の表紙に用いられるのも頷ける、といったところである。江戸時代の資料に留まらず、『川辺郡史』や『立花志稿』といった近代の資料をも展示し、富松城やその城主がどのように伝承され、考えられてきたのかを紹介していたのが印象的であった。

次に第Ⅱ章について述べていこう。本章では、富松城跡及び隣接する東富松遺跡Ａ・Ｂの発掘調査成果を詳しく紹介しており、展示資料の並びはおおよそ時代順となっている。まず城郭として機能する以前より富松城周辺で人々が活動していた痕跡のあることが示される。古いものでは弥生時代の竪穴住居跡が検出され、鎌倉時代頃には寺院の存在した可能性が示されている。続いて城郭として機能した時期であるが、前述した初見史料よりも早い十四世紀代の遺物が出土したことにより、この頃から富松城が機能していたことが提示された。その後時期を経るごとに堀の掘削・改修が重ねられるが、その様相は平面・断面図と発掘調査時の写真のパネルによって示されており、概要をつかみやすい構成となっている。なお、調査地点図には各調査の番号が振られており、展示される各遺物のキャプションにその番号が記載されているため、出土地点がどこであったのか確認しやすいよう配慮がなされ

ていた。展示内容を吟味するにあたって遺物の出土地点は必須の情報であるため、見学にあたっては大いにその恩恵にあずかった。遺物は古いものでは須恵器坏身や北宋銭が、比較的新しいものでは唐津焼や備前焼が展示されていたが、やはり展示資料の多くを占めるのは富松城が機能した十四～十六世紀の遺物である。

二　展示評

以下では本企画展を見学して評者の気になった点や考えたことについて述べていこう。

本企画展を見学してまず抱いた感想としては、現段階で富松城についてどこまで明らかになっているのかについてしっかりと理解することができた、ということである。まさに企画展のタイトル通りであり、本企画展の意義が第一にこの点にあるのは間違いなかろう。しかし、ここで敢えて指摘をするならば、現段階でどこまでわかって、どこまでがまだまだ謎だらけなのか、最後にまとめや展望を示したほうがよかったのではないだろうか。前述したように、確かに富松城に関してどこまで明らかになっているのか首尾よくまとめられた展示構成であったのは疑いない。しかしながら評者としては、それゆえ逆に謎が深まったとも感じたのである。展示は第Ⅱ章の最後に最も新しい時期の遺物を配置して、そこで展示室の入口に一周して戻ってくるかたちとなる。最後に改めて現段階での判明点・課題点を示して締めてもらいたいというのは評者の我儘であろうか。

続いて、展示の工夫と内容に関して感想を述べたい。展示室の入口には展示の導入部分が配置されていた。そこでは企画展開催にあたってのあいさつの他に、これまでに刊行された発掘調査報告書が展示されていた。専門家であれば発掘調査報告書は馴染み深いものであるが、大多数の人にとっては見たことも読んだことも、あるいはその名を聞いたこともないかもしれない。展示されているものを読むことはできないものの、調査が重ねられてきた結果として本企画展があることを如実に示し、一般の人々にも文化財行政の存在を認知してもらえるような印象的な導入であったと感じた。もっとも、評者が一般というよりも専門家寄りの立場にあるために抱いた印象に過ぎないかもしれないが。

他にも一般の人々が理解しやすいようにという配慮が節々に感じられた。発掘調査成果を示す箇所では、前述したよう

に平面・断面図の他に調査時の写真も示されており、写真があることで数値や図面だけからでは感じとれない堀の迫力を感じとることができるようになっていた。第Ⅰ章の範囲では、複雑で混沌としている畿内戦国史の富松城をめぐる一齣を、地図上に色付きの矢印を表示することでわかりやすくなるよう工夫がなされていた。評者も畿内戦国史は不勉強で理解が及んでいなかったが、この展示によりその一端を整理することができた。また、展示室の構造上の問題かもしれないが、四周の壁に沿って展示が並び、中央は休憩用の椅子が数個設置されているだけであった。そのため、途中で気になった箇所に戻ったり、各遺物の出土地点と調査地点図を照合したりといった作業が容易であった。意図的かはわからないが、このおかげで理解を深めることができたのは間違いない。また、椅子のお陰で休みながらじっくりと展示を見ることができ、細やかな配慮が嬉しい。

工夫に関して、評者が興味を抱いたのはYouTubeの活用である。展示室の入口にQRコードの掲示があり、YouTubeの展示解説動画のページに移動することができる[1]。これは展示解説の様子を動画にしたものであり、会期が終了した現在でも視聴可能である。これにより展示の内容を復習でき、あるいは実際に現地に足を運べなかったとしても展示内容を知ることができる。今後このような取り組みが各地の博物館において行われれば、企画展に行きたくても行けなかった人にとってはありがたいものとなるだろう。

さて、以下では内容について評者が感じたことを述べていきたい。

上述したように本企画展は文献資料と発掘調査の二章構成となっている。今日の城郭研究では、主に考古学・文献史学、そして城郭研究特有である縄張りの三分野の立場から研究が行われているといえる（当然、歴史地理学なども重要である）。勿論、これらは互いに不可分の関係にあるが、文献史学・縄張りの立場である評者からすると、本企画展では縄張りに関する展示・解説が不十分であったように感じざるを得なかった。

簡単にいってしまえば、縄張りとは土塁や堀をいかに配置するかという城郭の構造を指し、遺構の滅失が激しい平地城館では縄張りの具体像を明らかにし難いのは否めない。そこで発掘調査により検出された土塁・堀（溝）などから縄張りに言及することが当然必要となってくる。しかし、平地城館の縄張りを復元する方法が唯一発掘調査しかないわけではな

い。無論、発掘調査により直接遺構が検出されるに越したことはないが、調査範囲に自ずと限りが生じるため縄張りの全体像は把握できない。そこで絵図や地籍図を用いた歴史地理学的方法などが必要になるのであり、なによりまず、現存する遺構の理解を深めることが必須であると評者は考える。

以上の点を念頭に置くと、縄張り復元の成果に対し[2]、本展示では現存遺構を踏まえた縄張りへの言及が少なかったといえる。発掘調査成果として現存する遺構と道路を挟んだ位置にある東富松遺跡Bから検出された堀が紹介されていたが、当該区域と現存遺構のある区域とは縄張り的にどう整合的に解釈すればよいのであろうか。現存遺構の南側で検出された遺構においても同様の疑問が浮かぶ。

縄張りの観点から評者の興味を大いに引いたのは過去に作成された現存土塁の実測図の展示であった。この図からは、土塁の北端が堀内部に対し僅かではあるものの張り出していることが一目瞭然である。横矢掛りとは即断できないものの櫓台としての機能は想定してよいであろう。また、展示されていた遺構断面図によると、三次調査で検出された堀の内部に畝状の高まりがあり、二重堀状の様相を呈することが看取される。これらは平地城館が単なる屋敷ではなく軍事的機能を確かに有していたことを示す要素であり、かかる富松城の遺構は、本展示の第一章で明らかにされた戦国期畿内の動乱のなかで利用された富松城の姿と一致するものではないだろうか。文献資料から追及した第一章と発掘調査成果から追及した第二章とを有機的に結び付ける総括があれば、富松城研究の到達点・課題を見学者によりわかりやすく提示しえたのではないかと愚考する。

最後に、同時開催の「地域の宝・富松城跡―保存活用の軌跡」についても触れておきたい。この展示は、令和元年度に土塁周辺部分の市有地化が完了し、同四年一月に「富松城跡を活かすまちづくり委員会」発足二十周年を迎えたことを契機に企画されたもので、富松城跡の保存・活用の歩みを、その時々の催事の資料や写真などを展示して紹介している。富松城跡は開発の手の及びやすい平地にありながらも地域住民の尽力によって遺構が保存されてきた貴重な事例である。地域住民が主体となりつつ専門家も巻き込むことで保存と活用が行われており、冊子の発行[3]や城跡でのイベント開催、バーチャル博物館[4]など、注目される活動ばかりである。近年はお城ブームの影響もあり、特に山城を活用した町おこしが各地で行われている。しかし、平地城館跡ではそもそも遺構が残存しに

くいという事情も相俟って、山城に比して活用例が少ないように思われる。それゆえに、本展示は僅かに遺構を残すだけの平地城館をいかに保存し活用するか、貴重な参考事例を提供していると評価できる。研究・調査により明らかになった富松城の姿を示すのが今回の企画展であるとすれば、同時開催の「地域の宝・富松城跡」展は富松城の現代史をまとめたものといえ、両者が合わさることで富松城についての総合的な理解を深めることのできた意義深い展示であったと評価したい。

おわりに

以上、本稿では「―まだまだ謎だらけ―　ここまでわかった富松城」を見学した感想を取り留めもなく綴ってきた。評者の力量不足ゆえに我儘な注文ばかりとなってしまったことは否めず、この点をお詫び申し上げたい。ただ、評者がここまで富松城について考えをめぐらすことができたのは偏に展示内容が的確なものであったからに他ならない。展示室内を何度も行き来して富松城に対する理解を深めることができ、平地城館に関心を有する評者としては学ぶところ大であった。本展示を企画された皆様に感謝するばかりである。

前章でも述べたように、本企画展は同時開催の展示と合わさることで更に意義の深まったものであり、これによって富松城跡そのものの意義を提示することにもつながったのではないかと考える。本企画展及び富松城跡の保存・活用の事例を踏まえ、今後他地域の平地城館でも保存・活用の機運が高まっていくことを期待して本稿を擱筆する。

註

（1）YouTube チャンネル『れきはく』「【ギャラリートーク】まだまだ謎だらけ―ここまでわかった富松城」(https://youtu.be/YEiw9y1HQ94)　二〇二二年七月二十六日最終閲覧。

（2）主なものとして仁木宏「戦国富松都市論―尼崎市富松城・富松集落の研究―」（『地域史研究』第三三巻第一号、尼崎市立地域研究史料館、二〇〇三年）が挙げられる。

（3）『もっと知りたい中世の富松城と富松』（富松城跡を活かすまちづくり委員会、二〇〇七年）。

（4）http://www.tomatsujyou.com/index.html　二〇二二年七月二十六日最終閲覧。